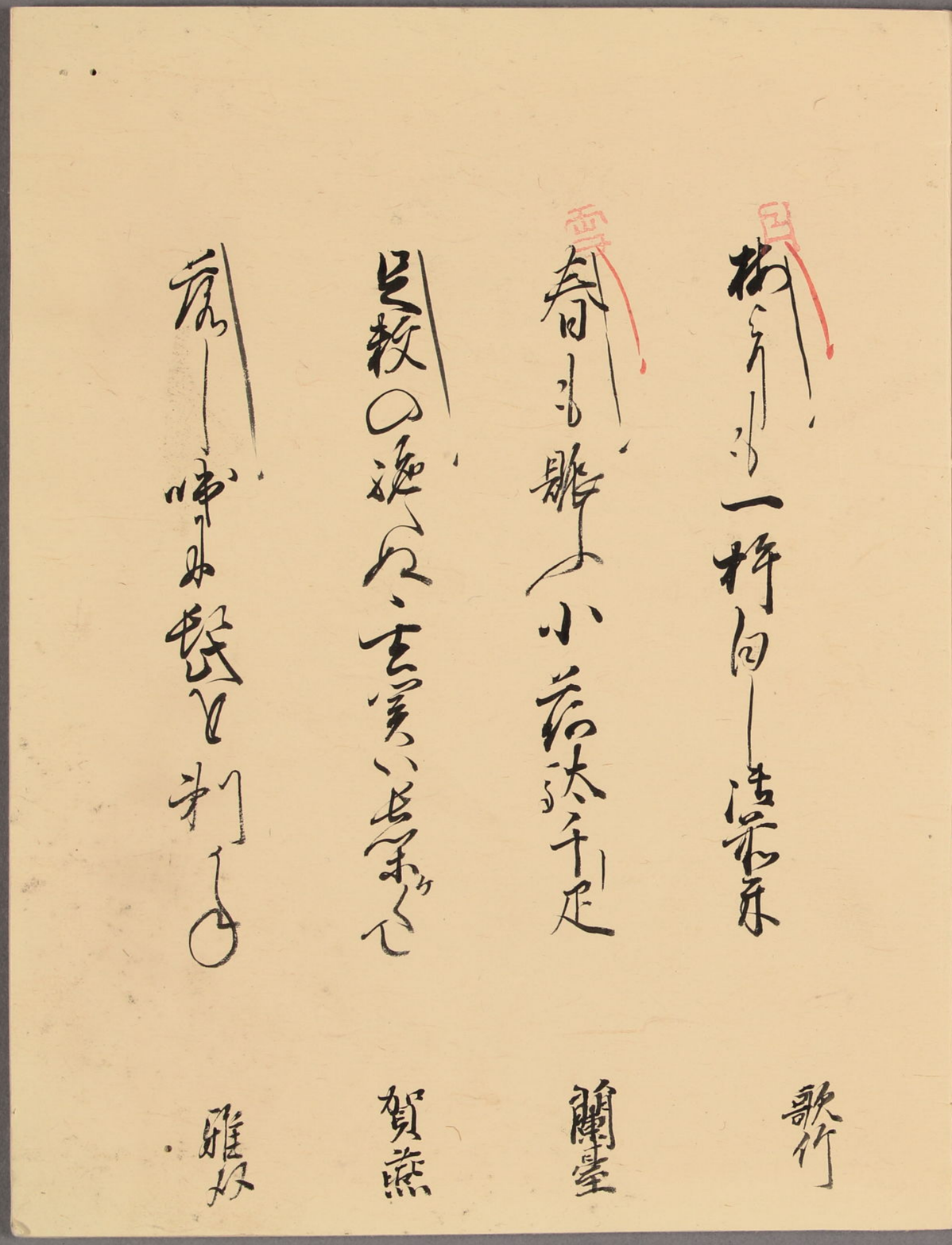
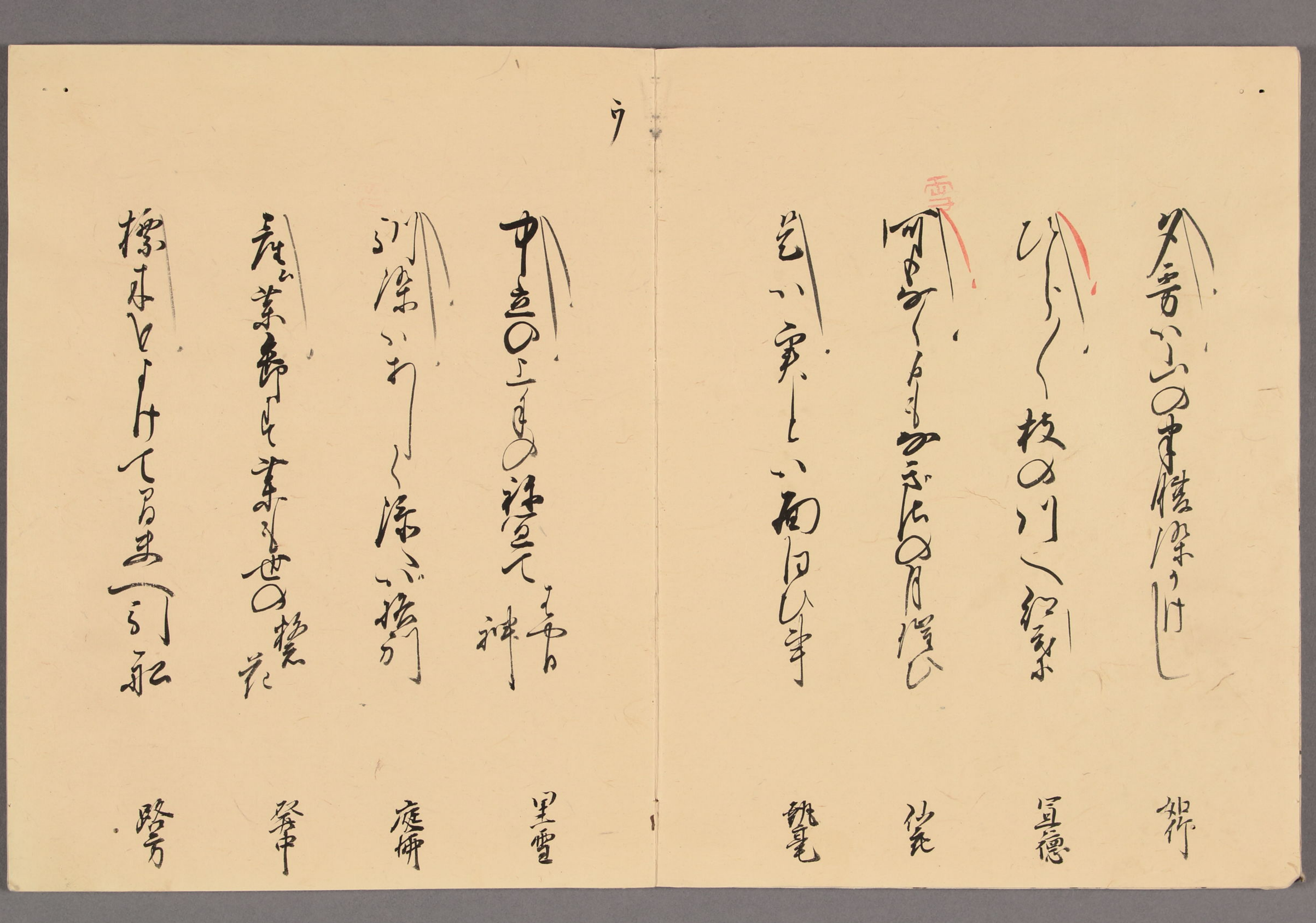
百韻

巾茶茶


一杯白酒一法茶
歌行
春日雖小苑林千足
蘭臺
見教の通り古賞い出まくて
賀燕
雅奴



大雪や山の中なる信濃路　如行

しら〳〵と枝の川〳〵紅葉　冥德

雪

何やらぬ花の月淀　仙花

芝い寒と小雨日暮寺　桃亀

中意の上ぬる神　里雪

河原いかし〳〵深ぶ指方　庭柳

表に茶毒と茶の煙花　琴中

標本とみて丸太引取　路芳

百年の年で十年去った分　　味言

表い長能裏いこまるの　　流水

七笑の七夕の海の星笑い　　柳葉

ホ〜の波の波の小鼓　　琴

遠い京の祇園の陣　　熱海

仲間

桜咲の姫さん七夕と寝る　　玉貞

物者と酒とでうまる所の　　歌山

年のかい笑い面の面云　　珠英

紅葉

嵩峯

雅楽

たいこ屋氏の昔(ッヅ)ける

日華山雲峯掛物

毅の初春は華厳

紅葉の枝

蓼水

一ッ紅葉の方(夫)に蓼く

松月

一松

紅葉の脇

蓼水

紅葉の色は蓼くなる

蓼水の華未だ味ふ

主の新今宵為べ嘆嘆
為べが彼の解剖と法方　芳氣
大臣の異紙面でし声　早月
役目の欄と責る先法　早雪
松風常陸の庫の常世ら　源左
為べ久し成蓮の古歌　御象
月は毎べ為べ来るのぞ　御英
彼邦のおこて師と同之て　御行

其心清い月の如く東西
葉揚枝さゝ長鳥帽子下
宮淋　演英橋い涙ぞ
合掌と伸べ人為に帰の業

清方
雅樂
雅好
月

毅へ深小判の数御
月
ゆとゆ月の嶋巣
祭中
河遠く日傘や軒の東の町
蘭臺
尋ぬる大佛の陰
清方

信州中之郷の桜つゝみ祥　玉芝

天と動て高遠の樓　一杖

なげき中に句碑ゆゝしき年　舞梅

新て中と拍子ぬけ　祝山

さくら月ゆゝ紙子の花の形　嘉年

秋深く中に鳴りゆゝん　鶴堂

別宅ゆゝて語ゆゝ蓬莱　賀来

舟に乗ゆゝ世ゆゝが桃せ　雪

墨ぬりの秋の屋の仏の光　鼎

涙ぬぐふ袖さびて高雄桜かな　羽紅

かなかなこゑ切風ふかす屋の月　巴雪

十日夜つゞく男高き　冬雄

姉妹二枝ずつ折て樹の海　鼎

去年ぬる邦の庭ど　新竹

小社を云ふ立ぬ山口立　聚水

海ぬ見ぬ北国奏し　鉄山

淋しさハ庭の古茶をまさ以て　律角

流し置きも君が眼鹿り　芦弘

菊もりハ露云の婦き秋まさり　一松

むさしと庵人のかげそ蝙蝠　袋

打見るハ勇氣ありなる信濃尻　蘭臺

一二ふたて緯で掛る巳の右　賀慈

小寺書ある銅池も見て七と十ハ掛　洛芳

謙如の秋讀　山ちかく雲　竹行

二年の行末もかぎりなしん　舞年

法元日と毎年の如く梅　雄翼

元旦一枚上て浅しい星　芳

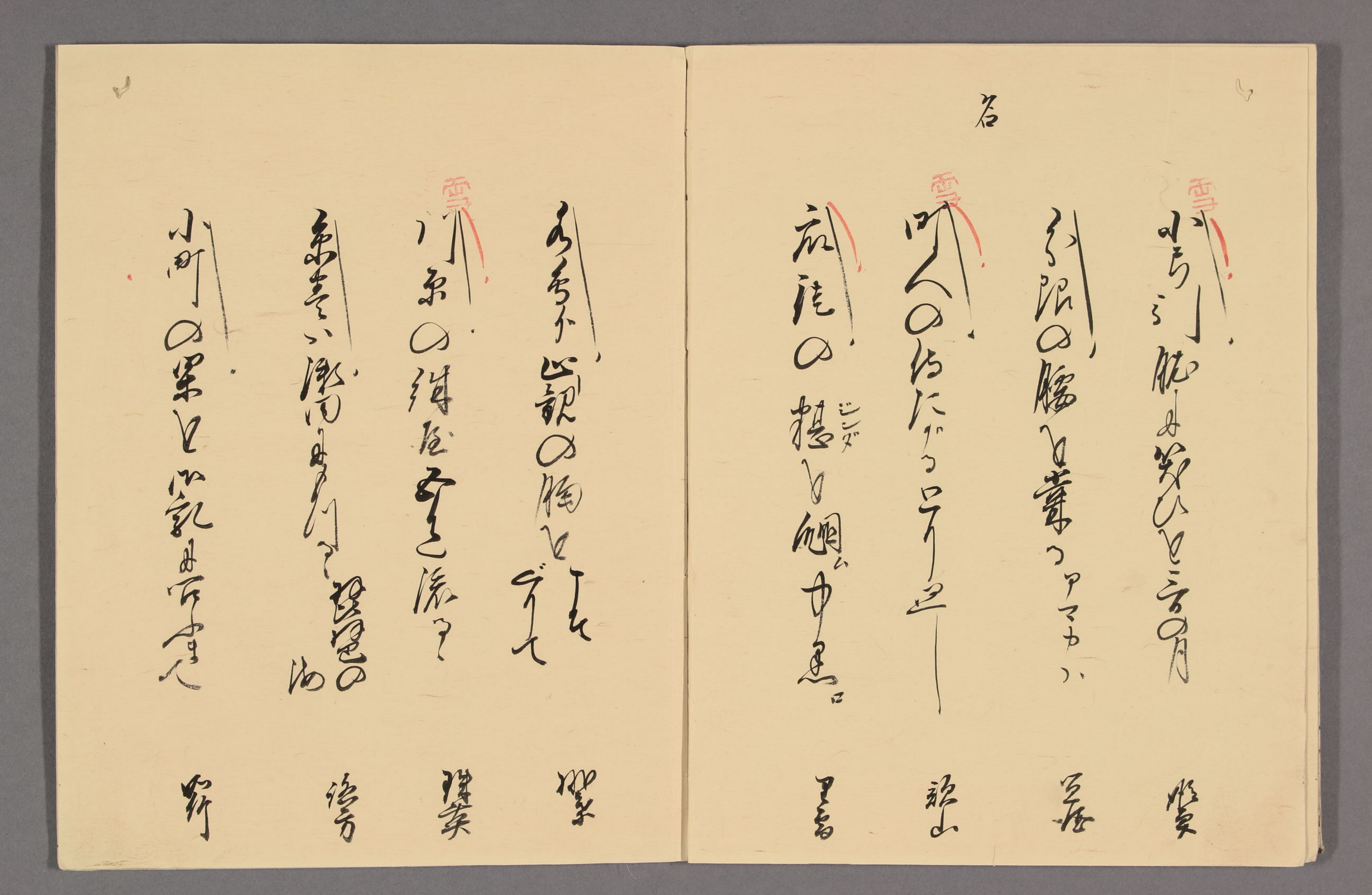
年を見て同業なぐさめ　拙梁

[illegible]と本郷山　雄実

[illegible]ず[illegible]　庭柳

[illegible]の中[illegible]庭ゆが祝の長　嵩青

[illegible]の[illegible]て[illegible]　理子



舟門をたづね侍りて

蛩

酔ふに成て一杯ふる事を忘れ

月

蝶の夢こゝ胡蝶にそなる

庭柳

京都の世話焼の庵

蛩

寛政八年申年八月十二

蛩

秋雨の漏る夕の燈火

鈴斧

法華月の夜引上て

俳

清白元祐の長

一杯

鶴飼い木枝の庵の冬ごもり　春章

蒲鉾ひらけ百物が売　麟堂

雞の鳴く頃ひ吹かれけり　春章

夕の格子鄙の押し　雅好

深夜の太鼓寒さ忘れて　芝郎

世界の浮沉二興引き出す　涼水

竹家い代ひいき花の向う　東民

さそそ我めいた人の見る　雅竜

御光

皇恐

[illegible]

宮殿に咲き誇る桜の花

陰陽寮の恵

各四句皆詩

三十八、蘭臺　隱五字　雪ニ　朱

二十六、雁雙　隱五字　長ニ

九、歌竹　花月長

十九、歌山　苍雪長ニ

十六、流水　月雪長ニ

十五、宜德　苍朱

十四、和言　月雪長

珠英　月雪

玉頂　月朱ニ

十二、里夕　月朱

姫莫　雪ニ

仙花　雪朱長ニ

十一、賀燕　月長

庭栁　月長

十、一松　雪朱

九、里雪　朱ニ　七

八、伴角　朱　七ニ

芦船　朱　七ニ

七、理嘉　朱　七

六、

桃葉 朱

發中 長二

五、

如竹 七

路方 七

寄幸 七

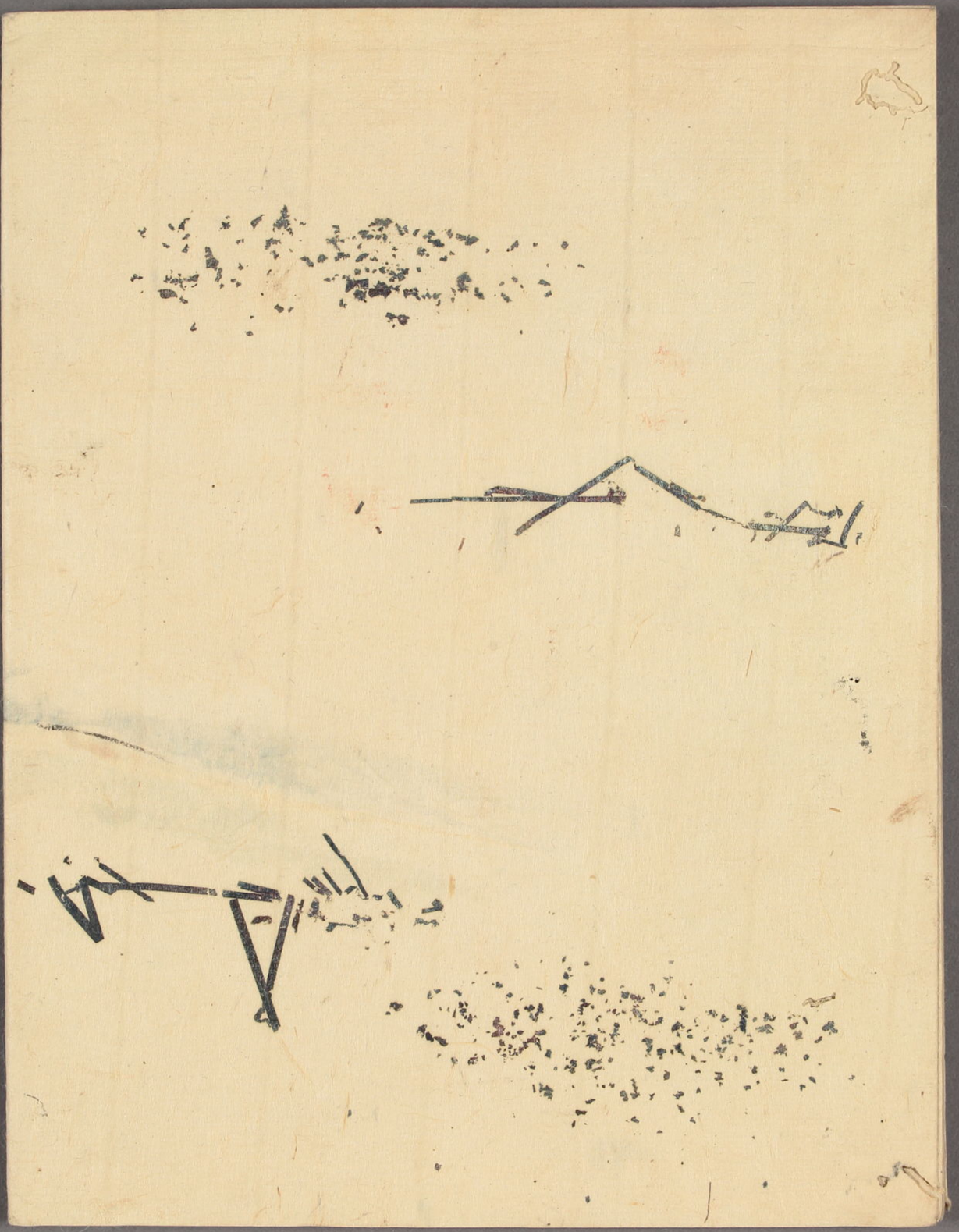
一廻

玉芝 朱

執筆 三句點

元文二丁巳歲正月十一日於

向屋敷奥行



元文二年晋十一月
於向屋敷

百韻
[illegible]

[illegible]

五十四